

葉桜照月

ハイ、『読者』の皆さん、読めてますか？

わたし、天野美那。あなたの世界の誰かが、あなたの世界で読まれるために創られた世界にいる、ひとつの存在。

じゃあ、どうしてわたしがそっちの世界に干渉できるか、って？

それはわたしが、神様だから。納得いつてくれたかな？わたしは、『読者』の皆さんのいる世界からは次元的に下の世界の生命だけど、その低次元世界の平均的住人からは高位の層に位置している、そういう神のひとり。

あなたの世界の誰かさんは、世界を創るだけ創って、そのまんまにしたの。だからわたしがこの空白世界に流れ着いても、咎める者は誰もいなかった。ここでわたしは神様になった。今から、この世界に息吹を吹き込むの。わたしはクリエイター。世界はわたしの思いのまま。

さあ、世界に色を付けましょう。

一番最初に決めるべきは、まず、わたしがこの世界にどこまで関わるか。聞いた話だと、お手伝いさんとして神を量産するタイプと、ワンマン経営でガンガン取り仕切っていくタイプの二つが主に世界デザインでは用いられるみたい。じゃあ、わたしはどうするか？

決まってるじゃない。どっちも選はないわよ。

わたしはね、何もしたくないの。ものぐさだからね。だから一人で全てを担うのはまっぴらだし、他人に手伝わしてもらうのも嫌。全部やっておいてほしいし、わたしは放っておいてほしい。だからわたしはあくまでも枠を作って、その後いかに世界が広がり動くかは成り行きと後

任の他人たちに任せたいと思う。だから、わたしが作るその枠はどこまでにするか、そこに絞られる。

まずは世界を神の住むところ、人間の住むところ、そして穢れた死者の住むところに分けなくっちゃね。神とだつて居たくないのに、なんでそれ以外の生命と同じ領域にいなきやいけないのかしら。

……でも、これだけじゃ淡白でつまらないわ。そうね。もう一つ作っちゃいましょうか。誰が住むかなんて知らないわ。作れば、あとの神たちが何かしら役割を与えてくれるでしょう。

人間の住むところは作った。それでもやっぱり大地を創る神はわたしじゃない方がいいよね。そんな面倒なことわたしはしたくないの。あくまでも世界の枠を創るだけ。それに、大地を創つたり功績を残したりすると色々なところで崇拜されて表舞台に出ざるを得なくなってしまうし。

神の世界は、まあ、適当でいいや。山とか川とか崖とかあります。広いです。うん、後の神達の自由度を高めなくちゃね。

死者の国。ここにも神様を置くべきかしら。でも汚いから、わたしの名前を使うなんてさせないわ。むしろわたしの名前を反対にしたヤツくらいがお似合いね。逆位置に配置されておしまいなさい。

わたしはやることやったらもうどっかに隠れて寝たいわね。他の神様とも会いたくないから、神の国にも居たくないくらいだわ。それに、わたしは仕事を最小限で済ませたいの。三つ……違った、適当にもう一つ挟ん

だのだった、四つの領域の枠組みだけ作って、内容は適当に後の神が決めてくれればいいわ。

最後に欲しいのは、物語性かしら。

設定だけでドラマを感じるような、ガツンとしたものがないわね。……そうだ、死者の国の神と、大地を創った神は、実は知り合い、なんてどうだろう。パンチが効いていないならもっと深い関係でもいい。きょうだい、親子、あるいは夫婦とかね。

さあて。わたしの仕事は終わったわ。そのうちセンスを持った神様が居ついて、存在を創り、物語を生み出していくでしょう。ま、わたしには関係のないことね。わたしはもう寝るわ。

『読者』諸君、さようなら。

わたしの作った「ヒノモト」の世界、楽しんで見えてよってよね。

蛇足注釈

日本神話においては、いわゆる創世神は存在せず、高天原は最初から存在している。ここに立て続けにどこからともなく神が現れるが、これらのうち最初の五柱を別天津神と言う。

これに続いて二柱、そして未分化であったのが男女に分かれた五世代十柱の神が現れる。この七世代十二柱を神世七代と言う。有名な伊邪那岐・伊邪那美はこの神世七代の最後の世代にあたり、それまでの神が全て出現してすぐどこかに身を隠してしまったのに対して、積極的にその場にとどまって、国生みをすることになる。

別天津神の一柱目、つまり日本神話上はじめて世界に姿を現した神を、アマノミナカヌシ(天御中主)という。